



## 現場で見たチェコ・フィルの暴挙

マーラーゆかりの地をめぐる旅で

平本 修

それは異様な光景であった。口笛が鳴り、怒号が飛び交って、客席が騒然としている。ステージ上の楽団員の顔が引きつっている……。ここはチェコ・フィルの本拠地、ドヴォ

ルザーク・ホール。2010年5月7日、チェコ・フィルが「今日は演奏を行わない」と告げた直後のことだ。

われわれツアー一行6名は、前か

ら3列目の中央に陣取っていた。昼間プラハ市内の見学をし、午後7時半、インバル指揮のマーラー／交響曲第10番の演奏が始まるのをいまや遅しと待っていた。

それにしても何か様子が変わる。指揮台の左横にスタンド・マイクが用意してある。それにステージ奥の空っぽのコーラス席にただ一人カメラマンが陣取っている。はてな？ 今年がマーラー生誕150周年であるから、演奏に先だってセレモニーか挨拶があるのかな？

開演時刻を5分過ぎたころ、後ろの方からパッパッと調子を揃えた拍手が起こった。アンコールを促すときによく起きるあの拍手だ。“早く始めろ”という拍手だな。その後2度ばかり同様の拍手が起こり、開演時間を十数分過ぎて、ようやく楽団員がステージに登場した。しかし表情が硬い。よく見ると誰ひとり楽器を手にしていないし、所定の位置に着いても起立したままだ。やはり、セレモニーをやるのか？

ほどなく背の高い男性が女性2人を引き連れて指揮台横に立った。そして何やら話し始めた。ややあって、後方から大きな声がかし、ざわめきだした。拍手音もバラバラ聞こえた。何をいっているのだろう。そのうちあちこちから声が飛び始めた。

われわれのすぐ近くの人たちも大きな声を出し始めた。これは明らかに抗議している声だ。ふと後を振り返ると、すでに席を立てて移動している人たちがいる。さすがにここまで来ると“今日は演奏をやらない”といっているのだと理解できた。

男性の話が終わると、女性がペーパーを広げて声明文を読み始めたが、何しろすべてチェコ語での話な

ので事情がわからない。「何たることだ！」と怒りがこみ上げて、頭の中は真っ白になった。後で訊くと、続いて2人目の女性が英語の声明文を読み上げたそうだが、まったく耳には入って来なかった。

出口付近でようやく現地ガイドに出会えた。個人的にご夫婦でこの演奏を聴きに来ていたのだ。「くわしいことはわからないが、文化大臣がチェコ・フィルのトップのクビを切った。文化大臣は元チェコ・フィルのトップであった。この処置に抗議するストライキだ」といっていた。

それにしても演奏を楽しみにやって来た聴衆をだまし討ちに、ストライキ宣言を一方的に押し付けるとは卑怯極まりない。“演奏に先だって抗議集会をやらせてくれ”が許せる限度だ。政府に抗議するというより、聴衆を人質にして、ただ自分たちのうっぶん晴らしをしたとしか思えない。

“マーラーゆかりの地めぐり”ツアーは、こうして波乱の幕開けとなったが、気を取り直してマーラーの生家へと向かった。途中標識のない田舎道を何度も迷いながら、小さな集落、カリシュト村に辿りついた。生家は改築されてはいるが、いまはペンション「マーラー」として残っていた。ユダヤ人差別政策のため、生後わずか3カ月で死去させられた生家だが、マーラー関係の資料が展示されていた。

続いて15歳までの幼年期を過ごしたイーグラウ（現イスラヴァ）に向かった。ここは大きな街で、中心部にあるマーラーの住居を訪ねた。この住居は記念館として大切に保存されており、資料もたいへん充実していた。その後マーラーが通った学

校、教会、劇場を外観見学した。

つぎの目的地はウィーンだ。世界遺産の街テルチで遅い昼食をとり、夕刻ウィーンに着いた。

翌朝11時からウィーン・フィルの定期演奏会である。「今日は演奏してくれるだろうな」とつつい口に出てしまう。

この日の演目はガッティ指揮のマーラー：交響曲第5番である。1年前来たときの席は1階の中央の席だったが、今回は前から5列目の左横にある、いわゆるボックス席である。このボックス席だと、ステージが全部見渡せ、すべての音を明瞭に聴き取れる。長い残響が後方に消えるのが確認できたが、直接音に比べれば音量が非常に小さいため、まったく気にならない。

ガッティは、暗譜で実に精力的に棒を振った。ときに歌い、時に唸る声が聴こえてくる。この熱い思いが楽団員にも伝わるのであろう。たいへんな熱演であった。マーラー音楽はダイナミック・レンジが広いのが特長だが、大太鼓単独での微弱打音から、床を揺るがすトゥッティまで、音の洪水が全身を包みこんで魂を揺さぶる。これぞ生演奏の醍醐味だ。

第2楽章の途中で、ふと前の席に眼を移すと、熟年婦人が胸の前で手を合わせ、中空を見上げている。明らかに祈りを捧げているのだ。時折あふれ出る涙をハンカチで拭いている。マーラーの音楽に神を感じるといわれるが、まさにそれを実証する光景が目の前に展開し、思わず目頭が熱くなった。別席で聴いていたご婦人にこの話をすると「私も涙を流していましたよ」。

1年前にゲルギエフで「火の鳥」

を聴いたときよりも、今回は何倍もの感動を得た。マーラー音楽の持つ力と熱演の賜物だろう。楽団員がステージから引き揚げても、なお拍手が鳴りやまなかった。

生前のマーラーは、作曲家としての評価は低かったが「やがて私の時代が来る」と予言した。来年は没後100年になるが、予言どおりに見事に花開いている。この感動でわれわれ一行はすっかり元気を取り戻し、つぎの訪問地に向かった。

宮廷歌劇場の指揮者時代のアパートや妻アルマの実家を外観見学した後、マーラーの墓所に向かった。中央墓地ではなく、一般墓地の一角に、シンプルだが威厳のある墓標が立っていた。華美な葬儀を嫌ったマーラーにふさわしい墓であった。花束を備えて手を合わせた。

残るは2つある作曲小屋への旅だ。最初にヴェルター湖畔の作曲小屋を訪れた。湖畔にマーラー家族が生活していた家があり、そこから急な斜面を30～40m登ったと思われる中腹に、ひっそりと作曲小屋が建っていた。われわれは遠回りして途中までバスで行き、そこから緩やかな坂を歩いて登ったが、体力のあるマーラーは真っ直ぐに登ったと思われる。午前中はここで作曲に勤しむのが日課だったそうだ。

小屋は何の変哲もない10畳程度の真四角な部屋で、入口を入ると、三方の壁には窓があり、周囲の林を見渡せた。“マイアーニッヒの山荘”と紹介されている例があるが、日常生活ができる設備はなく、“小屋”の方が実態に合っている。そこには下界の騒音はまったく届かず、人工的な音を嫌ったマーラーにとってお気に入りの場所であったに違いな

い。ここで4番から7番の交響曲を書き上げている。

静かに吹き抜ける風。揺れる木の葉。柔らかな木漏れ日。時折聴こえる木の葉のざわめき。鳥の声。木々の隙間から見下ろす湖面の情景等々、自然の中にどっぷりと浸かり、さぞかし心を癒されたことだろう。その心休まる気持ちを、かの有名な5番のアダージェットにしたために違いない。アルマに対する愛の表現説もあるが、この地に立ちみると、自然から得られる安らぎを歌ったものに違いないと、確信するに至った。

翌日アッター湖畔の作曲小屋に行った。時代的にはこちらの方が古く、山小屋と同じ作りであるが、一まわり狭い感じがした。岸边に建てはいるが、山小屋と違ってすぐ近くにマーラーが利用したホテルもあった。現在も営業していて、小屋の鍵を管理している。この小屋で2番と3番を書いているが、静寂という点では満足できなかったのであろう。ヴェルター湖畔に移ったときは、湖畔ではなく、人里離れた山中に作曲小屋を建てている。

これでマーラーの旅は終わりとなり、モーツァルトの生地ザルツブルグを経て帰国した。

私にとっては、この旅はドヴォルザーク・ホールの響きを確認するの

が最大の目的であったが、これは適わなかった。

今一つ確認したい事項があった。EXTONのチェコ・フィルの録音は、左右奥行きともに広く音像が展開し、明確に定位する。収録用のマイク・レイアウトがどのようになっているのか強い関心があったが、果たしてそのレイアウトには特長があった。客席前方のステージに近い位置に2列に2個、4個と配置されており、ステージ上には、指揮者の頭上を頂点とした二等辺三角形の各コーナーに1個ずつセットされているだけだった。

残りはステージの後方、つまり残響用と思われる位置に前後高低を変えて10個のマイクが吊られていた。これらのマイクは外形が極めて小さく、こんなに小さいマイクで大丈夫かと思わせるほどだ。ベルリン・フィルハーモニーや楽友会ホールでは、ステージ全面を覆うようにマイクが配置されているが、それとはかなり違う。このレイアウトの違いがああ定位と音場をもたらしているのか？

近年マーラーがよく演奏され、CDも盛んに発売されて、オーディオ愛好家にもお馴染みになって来た。今回の旅は、そうしたマーラー音楽をより深く理解し、感慨を新たにす意義深い旅であった。